

佐渡米通信

こめへる

2025年 11 月号

発行日:2025年11月

発行：佐渡農業協同組合 担当：総務部企画総務課 駒形(葵)
jasadosoumu02@snw.ocn.ne.jp

令和7年産米品質・集荷の進捗

令和7年産コシヒカリの1等米比率は10月8日時点で64.9%で、集荷率は契約数量に対して55.4%でした。前年同月と比べて125%の進捗率です。出荷状況については9月22日の初出荷から10月9日までで累計385トン出荷しました。

9月下旬に「朱鷺と暮らす郷」推奨店説明会を開催しました。多くの推奨店の方々に佐渡米が欲しくても手に入らなかった過去2年間があったため、通年で販売出来る量を確保してほしいという声があがりました。JA佐渡としては引き続き出荷結果の声掛けを行い、1俵でも多くお届け出来るよう取り組んで参ります。

令和7年産の検査状況(10月8日時点)		
品種	1等米比率	集荷比率
コシヒカリ	64.9%	55.4%
こしいぶき	58%	75.5%



「朱鷺と暮らす郷」推奨店説明会の様子

佐渡の米農家さんにインタビュー

畑野地区の相田満夫さんにインタビューさせて頂きました。相田さんはコシヒカリ・こしいぶきを作っています。コシヒカリについては、生物多様性・生きものを育む農法を基本とする肥料・農薬を減らした5割減減栽培に取り組んでいます。地域の重要な担い手としてJA佐渡管内で組織された畑野地区営農委員を務めており、地域農業の発展にも貢献されています。

相田さんは、家族で農業を営まれています。農林水産省によると日本の農業を営む経営体の約9割は個人経営です。今日、法人化へ取り組む動きもありますが、自然を相手にした働き方のため、労働時間の工面がしやすい家族経営がこれまで基本となっていました。相田さんは、お孫さんも含めた家族全員で目指す農業、暮らし方についてよくお話をします。子供の頃から協働体験や対話を通して主体的な視点が養われていくことが想像でき、相田さんの次の世代への農業の繋ぎ方が感じられました。

地域の方から田んぼを引き受けてもらえないかとお願いされることも多いそうで、年々耕作面積が増え15haになったそうです。引き受ける場合の懸念点として飛び地になり移動の手間が負担となってしまうことが挙げられます。相田さんの場合「引き受ける際には場の場所・ほ場条件をしっかりと確認しているため、管理が出来る」とのことでした。生産効率を意識することで少人数で品質を落とさず経営規模を拡大されています。田植えの面積が農業収益を決める主要因となるため、相田さんは移植栽培に加え、専用種子を直接田んぼに播く直播栽培にも取り組んでいます。佐渡米ブランド向上を見据え、量と質どちらも兼ね備えた米作りへの姿勢に地域の方やJA佐渡職員から信頼が寄せられています。



収穫・乾燥調製について説明してくれる相田さん



息子さん(写真の奥左側)と一緒に2台体制で稲刈り



刈り取った稲は、奥さんがトラックを運転して自宅の乾燥機へ搬入